

日程：2013年8月20日(水)

講義 国外調査(ポートランド) イブニングサイトビジット マウントテイバー

文責：広島県神石高原町 伊藤 邦夫(研修生)

PSU (ポートランド市立大学) からバスで約30分, ポートランドの象徴ともいえるマウントフットを望み, 17ha という広大な敷地の中に3万年前に爆発してできた火山の穴がいくつも点在する珍しい風景が広がる, マウントテイバー公園。

火山の穴は1900年代に道路工事の建設途中で判明するという珍しい経緯を紹介してもらったのは, 公園の設立者であるデイブ・ヒルマン氏とスタッフの方々である。



公園の維持管理や公園局の手伝いが主な仕事であるが, 内容は多岐に渡り, 巡回・記録・落書き落とし・公園来訪者の対応などを現在所属するパトロール隊55名で対応しているようだ。

私たちが訪れた夏場は一年を通じて最高のシーズンであり, 多くの市民が夜の8時に近づこうかという時間にも関わらず, 散歩をしたり日向ぼっこをして楽しんでいた。

公園の入り口付近には来訪者用のビジターセンターもありこれまでに10,000人の人たちが来館したそうである。館内に貼ってあった世界地図にはあらゆる国と地域からやってきたことが分かるように色とりどりのピンが刺されており, 私たちもそれに倣ってしっかり足跡を残してきた。



初日の市内探索の時にも感じたが、どの公園も非常にきれいに整備されていて、ごみがひとつも落ちていないのがとても印象的だった。その点を質問すると、ボランティアの協力が非常に大きいということであった。活気あるネイバーフットボランティアを育成し、市民への意識啓発を定期的に行っているおかげで持続的に公園管理がスムーズに行える仕組みができていることが分かった。

しかし、実はこうした活動が始める前の 1970 年代には夜出歩くことが安全でない時期があり、90 年代に入ってから遊歩道の整備、サポートチームの編成を行うなどの活動を行い、公園をきれいにすることが周りの地価を上げることにつながるという実利的なモチベーションのコントロールも巧みに図って、行政とネイバーフットとの信頼関係を築くことに成功したということである。

公園を後にした後、夕食を食べるためにレストランに向かう途上でガイドを務めていただいた水道局の職員さんが道路わきを指差しながら排水処理の仕組みを説明してくださった。

意外なことだが、アメリカでは排水処理機能があまり発達していないため雨が降ると推量に対応できない水道管から水があふれ、排泄水と混ざってしまう被害にあっているということである。

このため、水の吸収のいいコンクリートを用い、水道管の更新に充てられていた莫大な予算を変えて花壇などの緑の道をつくることで、排水対策にとどまらず及びコスト削減及びコミュニティの育成を図るという画期的な整備を行うことができたということである。

ピンチをチャンスととらえ、ひとつの問題に対して複数の回答を導き出そうとするポーランドの人たちの知恵に感銘を受ける訪問であった。

